

クローズアップ

# NGO・NPO

特定非営利活動法人

## 国際交流ハーティ 港南台

～小さな力と継続と～

### 設立の経緯

「国際交流ハーティ港南台」が設立されたのは一九九二年九月です。その一年前、日本の企業で働く夫と来日したニュージールランド人の女性と出会い、医療の面で日本語の不自由な外国人を支援する必要性を痛感したことから、一年間の準備期間を経て、「国際交流ハーティ港南台」が誕生しました。医療通訳の人材育成のためにセミナーや勉強会などを開催し、試行錯誤を繰り返しながらたどり着いたのが多言語問診票です。

結婚する二〇組に一組が国際結婚で急速に国際化の進む横浜市に住む多くの外国人が、安心して暮らせるための支援として、医療、交流、日本語教室の三本柱を中心に活動してきました。

### 在住外国人のための多言語問診票、医療機関マップ、生活情報などの提供

数え切れないほど多くの人々の協力を仰ぎ、改定を繰り返して、九年間を費やして一〇科目一七言語の医療問診票が完成しました。現在、神奈川県国際交流協会（KIA）のHPから一三言語と横浜市港南国際交流ラウンジから四言語が自由にダウンロードできます。平成一八年度のかながわ民協協力基金の助成金を受けて、KIAとの協働事業として、トップページの多言語化に取り組みことになりました。外国人が日本人の助けなしで自由に使用できるようになることを

期待しています。

### 海外支援（フィリピン）二〇〇五年夏 三五〇〇人へのメディカルミッション実施 フィリピン海外支援部会の活動のあゆみ

一九九七年から会員の多並フビーが、フィリピン妻の会の仲間とマニラのストーリートチルドレンに寄付金、古着の支援を五年間実施しました。

二〇〇二年、ノビーの故郷イザベラ州ジョーンズで、毎年台風禍で多大な被害を受けている極貧の子どものために、バザー（焼き鳥）で資金をつくり、教室の建設資金、古着の配布など孤軍奮闘していましたが、最優秀賞を獲得した日本語スピーチ『私の小さなNGO』でその活動が紹介されました。

世界の発展途上国に一〇年間、糖尿病治療薬を無償で送り続けている「DMハンズの会」からのインシュリンの供与がジョーンズにも始まりました。

二〇〇三年夏、会長が一月間フィリピンに滞在して、古着や薬の配布、教育支援（無料ランチチケット六〇人分）などノビーの現地での支援活動を共に体験し、帰国後海外支援部会がハーティの活動の柱に加わりました。

二〇〇四年会員の病院検査技師、港南ラウンジの若いスタッフ二人がノビーに同行し一月滞在して五〇〇人への健診、医薬品の配布等のメディカルミッションを開

(特活) 国際交流ハーティ港南台

〒234-0054 横浜市港南区港南台5-10-31 TEL & FAX 045-832-0507

E-mail: pure.onosato@mbh.nifty.com URL: http://homepage3.nifty.com/heart-y-k/

始しました。極貧の子どもの多い一三の小学校での教育支援活動を実施しました。二〇〇五年夏一カ月間、「DMハンズの会」の医師、二人の高校生を含む八人が参加して、三三三三人への集団健診、寄生虫駆除、歯科治療、薬やミルクの配布、手洗いと歯みがき指導、古着の配布などを、現地の二五〇人のボランティアの協力を得て実施しました。

## スカラシップ制度の発定

これまでに二〇の小学校での教育支援を実施しましたが、その子どもたちの中から将来、村おこしのできる人材育成を目指して、一人の極貧の小学生を選抜し、スカラシップ認定証を授与しました。また、その家族全員をカバーする健康保険も加えました。

大学卒業までの学資募金が発定し、理解と協力の輪が広がっています。

## 今後の方針と目標

大規模なメデイカルミッションは休止して、われわれの支援活動の原点に戻り、対象を一日三食食べられない栄養失調の極貧の子ども(小学生)に絞ります。町役場で開催される健康フェアの会場にて、村から集まってくる極貧の子どもに薬やミルクを提供します。このまちで二〇年間も貧しい人への無料診療を続けているフアブロス先生を全面的に支援する方針を定めました。二〇

〇六年夏には心電図計を「ハンズの会」から寄贈していただくことになりました。

今年度は自立の支援として農業技術指導(マッシュルームやバナナペーパー)と英文の本を贈り図書館をつくりまします。

## 子連れ歓迎日本語教室と子育て支援サークル「Something Nice」

### ハーティの日本語話教室

現在横浜市で結婚する二〇組に一組は国際結婚です。言葉の壁に悩みながら子育てに苦労している親子の支援を重点の課題とし、取り組んできました。例えば保育園の手続きやごみの出し方などの生活支援が活動の原点にあるからです。幼児を連れた母親も歓迎し、親と子どもたちの両方を受け入れる態勢づくりに苦悩し続けました。そしてついに会場、無償ボランティアの確保の難しさなども何とか克服して、現在初級会話クラス、自由会話クラスに属する母親は安心して子どもを無償ボランティアと二人の有償保育士に託して日本語を学んでいます。日本語話教室の指導者は、特に有資格者でなくても教



↑日本語教室

え方の講座を開き、指導者の研修を行い誰でも参加できるようにしていきます。

### 子育て支援サークル「Something Nice」

四年前に言葉も分からず密室で子育てに悩んでいた日本語学習者のために友人をつくり、情報交換の場所が必要になりスタートしました。

幼稚園に入る  
と来なくなりま  
すが、これま  
に四七人の外国  
人親子が日本人  
の母子と出会い  
楽しく交流しま  
した。毎月三人  
のお母さんリ  
ダーが、マザーグ  
ースの歌や絵本の  
読み聞かせ、工作など  
毎月さまざま企  
画を立てて準備し  
ています。おばあ  
さん世代の会員  
もサポーターとし  
て、若い母親を後  
方支援しています。



↑着付け教室

われわれの活動はすべて『小さな力』から出発し、それがひたむきな頑張りや多くの人の善意に支えられて『継続』したことで思いが形になることを実感しています。

これからも、在住外国人が安心して暮らしていけるまちづくりに努力し「みんなちがってみんないい」をモットーに、医療等の情報提供、国際交流、子どもを包含した日本語教室、海外支援を中心に活動していきます。

クローズアップ

# NGO・NPO

## ハイチ友の会 ～西半球最貧国とともに～

### なぜ「ハイチ」か

「ハイチ」という耳慣れない響きから、カリブ海に浮かぶ小さな国をイメージすることは難しいかもしれません。カリブは「アメリカの裏庭」と呼ばれていますが、日本とのつながりは薄いと言われています。「なぜ、ハイチ？」——私たちがよく受ける質問の一つです。

一二年ほど前、当時大学生だった現代表が、アメリカ・フロリダの難民キャンプに海外ボランティアとして派遣されたとき、そこで出会ったのが母国の経済危機から逃れるために命からがら海を渡ってやってきたハイチの難民でした。

ハイチはコロンブスに発見された後、スペイン、その後フランスの植民地として、砂糖、コーヒーのプランテーション経営で栄えました。その間、虐待された原住民は絶滅し、代わりに九〇万人ともいわれるアフリカ人が奴隷として連れてこられたのです。一八世紀末、逃亡した奴隷が中心となり反乱を起こし、一八〇四年にはフランス軍を撃破し、独立を宣言。西半球ではアメリカに続く二番目の独立であり、世界最初の黒人共和国の誕生でした。しかし、その後もアメリカの占領、相次ぐクーデターや独裁政権、軍事政権の下で政情は安定せず、経済制裁などの影響で、一日一ドル以下で生活する人々の割合が五五%に上り、ごく一部の富める人を除き、大多数が貧困にあえいでい

ます。四国の一・五倍の面積に、人口八〇〇万人を抱えるこの国は、現在、西半球で最も貧しい国と言われています。

その後、ハイチを訪問する機会を得た代表が、「誰もやっていないのなら、自分がやる」と立ち上げたのが、ハイチの人々の生活を草の根で支援する「ハイチ友の会」でした。本部を甲府市に置き、それぞれのきつかけでハイチという国に縁を持ったスタッフが、仙台支部、京都支部という形で活動をサポートし、会員も北海道から沖縄まで約一〇〇人の方がいらつしゃいます。

### 主な支援活動

支援に当たって、まず私たちが着目したのは、七割ともいわれる失業率の高さと、二人に一人といわれる小学校の就学率の低さでした。創立の翌年にはハイチの画家の絵はがきの売り上げで二〇四台の足踏みミシンを職業訓練校に寄贈。また、スラム街に住む女性の収入向上を支援するため、女性協同組合から手工芸品を定期的に購入し、国内で販売するようになりました。同時に、現地で学校を運営する協力団体を通して学校の支援を行い、貧しい家庭の児童の就学を支援する奨学金制度を作りました。

ハイチ友の会に転機が訪れたのは二〇〇三年でした。年に一度の現地訪問で、ほかの援助団体が全く足を踏み入れたことのない山奥の村を訪問することになりました。この村出身の女性から、村の小学校の教師

ハイチ友の会

〒400-0812 山梨県甲府市和戸町928-2

TEL & FAX 055-237-5126

E-mail: friendsofhaiti@mindspring.com

URL: http://friendsofhaiti.home.mindspring.com/



↑支援先の農村の学校。教室なし、給食なし、トイレなし、とないないづくしですが、子どもたちはとても勉強熱心です

の給料が払えず、閉鎖の危機にあるという事実を聞かされたのです。スタッフが見せられた一枚の写真には、錆びたトタン屋根の小屋の前に立つ、みずぼらしい身なりをした子どもたちがいました。子どもたちのまなざしからは、「何とか学校に通いたい」という強い意志が感じられ、スタッフの心に強い使命感を与えました。その思いが一年後、橋なき川を渡り、ロバの背にまたがって山道を登り、この村に行くことを決意させました。そこから、この村において次々と新しい事業が始まりました。最初に行ったのは、豚の育成事業です。これは、住民に投票をしてもらったところ、最も支持を得た事業でした。仙台市の団体による支援金で購入した豚一〇頭を、学費の支払いが困難な家庭に分配しました。また、その後、住民を代表して五人が現地のNGOで農業研修を受け、果樹の接木技術を習得してきました。今年度は、専門家の助けを得ながら、村に

苗木を設置し、コーヒーや果樹の苗木を育てる計画です。本来、学校の運営が問題となっていた村において、植林まで事業が及んだのには訳があります。現地駐在員を持たず、スタッフもそれぞれに仕事を抱えながら活動している私たちの団体において、今後この村を定期的に訪問し、また、経済的支援も継続できる保障はありません。この事実が、最初に村の人に伝えました。いつか私たちがこの村を去ったときにも、この村が自立して発展し続けるためには——そう考えた結論が植林支援事業だったので。ハイチでは、生活燃料である木炭を得るための森林伐採が深刻な問題になっており、緑は二〇年前の四割しか残っていないといわれています。特に貧しい農村では、現金収入を得るために木を次々と切つて木炭を作り、都会に送る農民が後を絶ちません。木を失った裸の山に降る熱帯の激しい雨は、その土壌を洗い流して不毛の土地にしてしまえばかりでなく、山の麓では土砂崩れや洪水を引き起こします。二〇〇四年には、ハリケーンによる集中豪雨でおよそ六〇〇〇人が命を落としています。私たちは、この村の支援を通して、ハイチの農民がその本来の豊かさを取り戻していくことを望んでいます。

ハイチと日本の懸け橋を目指して

ハイチ友の会は、国際協力と国際交流という二つの顔を持っています。「ハイチと日

本の懸け橋になるう」——それが私たちのスローガンです。ハイチでの活動を応援してもらうためには、まず、ハイチのことを知ってもらうことが必要です。近年、力を入れているのがハイチ人のダンサーを招へいして行う、「ハイチ・ダンスワークショップ」です。この企画は、日本人ながらハイチの舞踊団に実際に所属していた経験を持つスタッフが、現地の才能ある若者たちが、経済的理由でダンスをあきらめていく姿を見て温めてきた、「いつか彼らを支援したい」という思いから始まりました。今年度は去る三月に、七日間にわたって東京、京都で開催し、延べ一〇〇人以上の方に参加していただきました。実のところ、この事業は毎年かなりの赤字を出しており、集客や資金調達にスタッフはいつも頭を悩ませています。しかし、こういったイベントを通して「ハイチに興味を持った」という声を聞くことが一番の励みになります。「ハイチは知られていないから」という言い訳を言う前に、伝えるという努力を今後も続けていかなければいけないと思っています。こうした種まきがいつか、花を咲かせることを祈りつつ…。



↑国立オリンピック記念青少年総合センターで行われたハイチ・ダンスワークショップ